

第3章 パネル調査結果に基づく3年間の経年比較分析

3-3 経年比較分析2（3年間回答を得た104人の比較分析）

平成19年度、平成20年度、平成21年度と継続してデータを取得することが可能な104サンプルにつき、過去3年間の被害からの回復状況に基づきグループ分類を行った上で、回復度が高いグループとそうでないグループの心身等の問題の状況や、生活環境等の影響要因の比較分析を行った。

3-3-1 被害からの回復状況に基づくグループ分類

平成19年度、平成20年度、平成21年度と継続してデータを取得することが可能な104サンプルにつき、精神健康状態（K6得点）、心身の不調で日常生活が行えなかった日数、事件からの回復状況（主観的回復度）の3指標への回答の推移状況に基づき、新たなグループ分類を設けた。

本グループ分類設置の目的は、回復傾向にある回答者（「回復層」）と悪化傾向にある回答者（「悪化層」）において、身体・精神的状況等との関係はどのようになっているのか、生活上の変化、捜査・裁判等の出来事、二次的被害等、周辺環境要因がどのように影響を及ぼしているのかを分析することにある。

【要旨】

上記3指標によるグループ分類と他の要因とのクロス集計・分析を行った結果、事件からの回復状況（主観的回復度）が最も回復層と悪化層の差異を色濃く反映できたため、以下、主観的回復度によるグループ分類と、クロス集計・分析結果について記載していく。

(1)グループ分類方法

主観的回復度とは、事件によって被った被害から自分がどのくらい回復したかを10段階で評価するものである。まず、主観的回復度を3つの段階に区分する（「0～3割回復」、「4～6割回復」、「7～10割回復」）。次に、平成19年度と平成21年度の双方の主観的回復度の回答結果が取得可能な99サンプルについて、各サンプルが平成19年度にどの区分に位置し、平成21年度にどの区分に移動したかにより、「回復層」と「悪化層」に分類する。分類の過程で「一定層」も出現するが、ここでは回復層と悪化層の差異の分析を主眼とするため、一定層は分析対象から除外した（図表3-47）。